

BL 消費の享楽 作者と読者の間に起こること

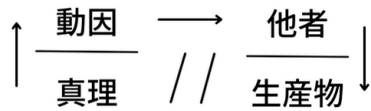


図 1 ディスクールの構造

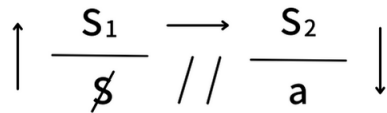


図 2 主人のディスクール

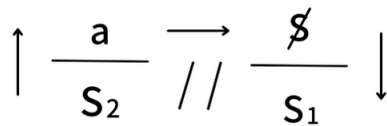


図 3 分析家のディスクール

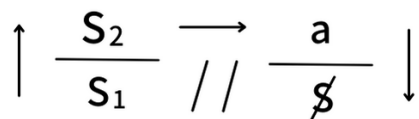


図 4 大学のディスクール

1. 要旨

近年、二次創作 BL 愛好者コミュニティにおいて異性愛規範、ミソジニー、ホモフォビアの克服へ向かう姿勢が多く見られる。これには二次創作 BL の作者と読者の転移関係（後述）を中心としたコミュニティのあり方が大きく寄与しているというのが本論文の趣旨である。

はじめに、本論文が対象とするのは二次創作 BL である。二次創作とは、既存の作品を何らかのかたちで利用し、派生的に新たな作品を創作する表現行為を指す。二次創作 BL とは、既存のアニメやマンガなどを原作とし、その登場キャラクターのうち、ある男性キャラクターA とある男性キャラクターB が恋愛関係になるという設定を仮想したのち、二次創作を行った作品のことを指す。

金田 2015¹が総括するところによれば、二次創作 BL を愛好する動機ははじめ、現実社会からの逃避や女性嫌悪、男性への復讐など否定的に考察されてきた。しかし次第に異性愛秩序の転覆や女性に固有の快樂という肯定的なものへと変わっている。二次創作 BL を愛好することには、現実社会の異性愛規範やミソジニーを逃避するにしろ克服を目指すにしろ、常にそれらとの関係性がつきまとう。そもそも女性として社会で生きるには、社会の異性愛規範やミソジニーに対する何らかの方策が必要とされるのが現実である。多くが女性である BL 愛好者たちもまた、現実社会の異性愛規範やミソジニーに対するつまずきを大なり小なり経験しているといえる。

ところで二次創作 BL における欲望はどのようなものだろうか。東園子『宝塚・やおい、愛の読み替え—女性とポピュラーカルチャーの社会学』によれば、それは人間関係に向けられる欲望である。二次創作 BL ではその創作過程において、原作となるアニメ、マンガの登場キャラクター同士のホモソーシャルな友情を恋愛関係に置き換える。原作における人間関係が重視されるのである。そして、他人の書いた二次創作 BL を読むときには、その作者が原作の人間関係に対してどのような目線に向けているのかに焦点が当てられる。つまり、二次創作 BL 作者が原作のキャラクターの人間関係に向けた欲望を見たいというのが二次創作 BL 読者の欲望である。

よって作者は読者の欲望の対象であり原因である。読者は作者の二次創作 BL を読んで、「こういう解釈があるんだ」と楽しくなる。この場合作者は読者の欲望をかき立てる原因である。また読者は数多くいる作者の中からお気に入りの作者を定め、その人の二次創作を中心に読む場合がある。この場合には作者は読者にとって直接の欲望の対象である。また読者は作者を通して自分の欲望を捉え、読者は作者に自分の欲望の投影を見る。ある作者の「解釈」と自分の解釈が合う/合わないと感じることによって、読者は自分の欲望を捉えることができるのである。ラカン派精神分析ではこのような欲望の対象であり原因であり、欲望を捉えるためのフィルターであり、欲望を投影するスクリーンであるものを対象 a と呼ぶ。

¹ 金田淳子、2015、「第7章 マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」 『文化の社会学』有斐閣アルマ 163-190.

ラカンは神経症の象徴界的側面と現実界的側面を同時に説明するために、四つのディスクールを用いた。この4つのディスクールの構造は図1のようになっており、真理に支えられた動因が他者に干渉した結果生産物が生産されるという構図になっている。

図2の主人のディスクールは疎外と分離の過程を一つの図で表したものである。精神分析において人は大まかに二つのジャンルに鑑別される。それが神経症と精神病である。うち本論で主に扱う、神経症の原因とは抑圧である。私たちは理性的存在であり道徳をもつが、他方で私たちは理性では考えるべきでないとわかっていることや道徳的には許されないようなことを考えたりしてしまうものである。そのような内容を考えてしまったとき、私たちの自我は受け入れがたいその内容を意識から切り離し、忘れたこと、なかったことにしようとするが、これを抑圧という(片岡2015:4)。この意識から切り離された内容は無意識として構成される。抑圧のうち原抑圧とはもっともはじめに起こる抑圧であり、上に述べたような意識と無意識をわけることは、原抑圧において起こる。

ラカンはこの無意識の登場、つまり主体の形成を疎外と分離として説明した。疎外とは、主体が〈他者〉の領野に誕生することである。私たちが言語という〈他者〉の世界に入るとき、以降私たちは言語によって自分自身を認識するが、原抑圧において無意識へと追いやられた内容が必ず存在するため、私たちは私たち自身を過不足無く表すことができない。それゆえラカンの主体は分裂した主体なのである。この分裂した主体が〈他者〉の世界、言語の世界に生まれる過程が疎外である。

このように言語によって疎外された主体は、〈他者〉の要求に逆らうことができなくなる。つまり、言語化された秩序(例えば法や常識、慣習など)にただ従うことしかできなくなる。なぜなら〈他者〉から与えられたシニフィアンでのみ自分が表されるというのは、「あなたは〇〇です」といった言葉によって自分自身が規定されてしまうということであり、「あなたは〇〇だから△△しなきゃいけないよ」と言われると、言語の世界に来たばかりの主体はこれにただ従うことしかできない。この不自由から抜け出すためには〈大他者〉の弱みを握るしかない。この弱みがラカンの記号でいうS(A)、つまり〈大他者〉の欠如、〈大他者〉の非一貫性である(松本2015:268)。つまり、法や常識、慣習などにも矛盾は溢れており、これがただ服従しなければいけない絶対的なものではないことを知ると言うことである。

そして主体がこの大他者の欠如と疎外により得た原初の享樂の喪失を重ね合わせるのが、分離と呼ばれる操作である。疎外によって主体は、〈他者〉に規定されることなく自由に振る舞うことはできなくなってしまう。これが原初の享樂の喪失であるが、分離を経ることで、〈他者〉の縛りの中でできる限りの楽しみを得られる程度には回復するのである。分離とは、主体が〈大他者〉の世界が一貫した秩序ではないことに気づき、その世界で生きていくために、失った原初の享樂とは違う満足を得ることができるようになる過程のことである。

る。

この違う満足というのが、フロイトが部分欲動と呼んだものに相当する、部分的な享楽、剰余享楽である（松本 2015:293、片岡 2015:139）。剰余享楽は、対象 a を対象とすることで得られる。剰余享楽はあくまで原初の享楽の代替品に過ぎないので真の満足を得られることはないため、主体は次々と湧き出る欲望をその場しのぎで満たすことを繰り返すことになる。

先ほど剰余享楽は対象 a を対象とすると述べたが、対象 a というのは欲望をもったのち遡及的に定められる欲望の原因=対象にすぎない。欲望というのは生きていれば何かと湧き出てくるものだが、人はその原因を定めたがる。このときに原因とされるものが対象 a であるということである。しかし、このように欲望の対象=原因を定めることで、人は欲望をある程度制御された形で享楽することができるようになる。

図2の主人のディスクールが表しているのは上に述べたような疎外と分離の過程であり、これらは社会適応の過程を表している。主人のディスクール（疎外と分離）において主体は、言語の世界（=社会、〈他者〉の社会）に入り、原初の享楽を喪う代わりに、剰余享楽を得ようになる。BL 愛好者の場合、読者は言語の世界に入ったのち他人とコミュニケーションをとるようになるなかで、社会の中で生きていくための自分なりの欲望として BL の楽しみを剰余享楽として得ようになる。主体が疎外とともに喪った原初の享楽は、異性愛規範、ミソジニー、ホモフォビアの存在すら知らないまま、自由気ままに振る舞うことだと言えるだろう。これらは、異性愛規範、ミソジニー、ホモフォビアを知った主体にはもはやかなえることのできないものだが、BL 愛好者たちは BL によってその一部を味わうことができるのである。

精神分析は医者である分析家と患者である分析主体の1対1での対話を中心に進められる。図3の分析家のディスクールは分析家と分析主体の関係を念頭においている。知 (S_2) という真理、すなわち分析家のノウハウに支えられた分析家 (a、対象 a) が分析主体 ($\$$) の前に現れ、その結果新たな主人のシニフィアン (S_1) が生産されるのが分析家のディスクールである。精神分析において、分析主体が自由に話しているつもりが、いつも一定の方向に話題が進むということがよくある。このとき分析主体は自分の中にひとつの法則を持った知があるのではないかと想定する。つまり無意識の主体が知をもったものとして想定される（片岡 2015:131）。そしてこの知をもった無意識の主体を分析家に投影する。これがラカンにおける転移の成立である。これが分析家は分析主体の前に対象 a として現れるということの意味である。分析家は分析主体の欲望の対象そのものであると同時に、分析主体の欲望を知っている主体として想定されるということだ。

さらに分析家のディスクールにおいては新たな主人のシニフィアンが生産される。主人

のシニフィアンとは、4つのディスクールの一つ、大学のディスクールで説明される(図4)。大学のディスクールではなんらかの権威としての真理(S_1)を根拠にした知(S_2)が学生(a)を斜線を引かれた主体($\$$)として誕生させる。大学のディスクールの S_1 は分析家のディスクールの S_1 とは異なる。大学のディスクールの S_1 は現行の体制の支配者、つまり主人であるのに対し、分析家のディスクールの S_1 は現行の権威が揺らいだ時新たな真理を生み出した者の言説、つまり新たな主人のシニフィアンである。

分析家のディスクールにおいて分析主体は、分析家との転移関係を通じた分析作業の中で、自らの剰余享樂がどのように形成されているのかを知り、新たな主人のシニフィアンを発見する。BL愛好者は、BL愛好者のコミュニティに入り、先に述べたようにお気に入りの作者(対象a)を通してBLから自分がどのような享樂を得ているのか、自分のBLへの欲望はどのような欲望であるのか、つまり自分の剰余享樂がどのように形成されているのかを知る。そして、同時に自分の欲望が現実社会においておおびらに認められるものではないことを知る。このことは金田2015で指摘されるように、二次創作BL愛好者が自らを「腐女子」と呼び、自分たちの行いを卑下することにも現れている。

但し最初に述べたように二次創作BL愛好者たちのこのような姿勢にも変化が見られる。「腐女子」と自称する自分たちの姿勢が「原作では当然異性愛者であるはずのキャラクターを勝手にホモにするヘンタイの私たち」というように現実社会のミソジニー、異性愛規範、ホモフォビアを内面化していることを指摘し、このような姿勢から抜け出そうという提言がSNS上で多く見られるようになった。これは分析家である作者との関係において新たな主人のシニフィアンが生産されたことによるといえる。

新たな主人のシニフィアンは、主体が新たな社会的紐帯を結び直すことを可能にする(松本2015:317)。つまり分析主体である読者はBL愛好者たちの欲望を目にし、自らの欲望を知るにあたり社会規範につき当たったが、作者の欲望を肯定するとともに自らの欲望を肯定し、多様な性的指向の承認という新たな社会規範、つまり新たな主人のシニフィアンとの出会いを経験したのである。

2. 目次

第1章 はじめに

第2章 二次創作BLとは何か

2.1 二次創作BLを作るのはどんな人物か

2.2 二次創作BLはどのように作られるか

2.3 二次創作BLはどのような場で発表されるか

2.4 二次創作 BL におけるカップリングの特徴と重要性

2.5 二次創作 BL, 商業 BL についての先行研究とその考察

第3章 分析家と分析主体の関係

3.1 疎外

3.2 分離

3.3 四つのディスコース

3.4 精神分析的なものが目指すところ

第4章 二次創作 BL の作者と読者の間に起きること

4.1 分析家←分析主体と作者←読者の類似点

4.2 二次創作 BL 愛好者にとっての新たな主人のシニフィアン

4.3 二次創作 BL コミュニティの複数性と精神分析のつながり

第5章 おわりに

参考文献

松本卓也、2015、『人はみな妄想する』青土社.

片岡一竹、2015、『新疾風怒濤精神分析用語事典』戸山フロイト研究会.

東園子、2015、『宝塚・やおい、愛の読み替え—女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社.

金田淳子、2015、「第7章 マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」『文化の社会学』有斐閣アルマ 163-190.